



Title	詩人の杖(トコ)の物語 : NZ桂冠詩人Selina Tusitala Marsh氏を迎えて
Author(s)	小杉, 世
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2019, 2018, p. 71-81
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72735
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

詩人の杖の物語^{トコトコ}

——NZ 桂冠詩人 Selina Tusitala Marsh 氏を迎えて——

小 杉 世

1. はじめに

2018 年 12 月に日本英文学会関西支部の海外研究者招聘事業の助成を得て、言語文化共同研究プロジェクト Cultural Formation Studies の研究グループが主体となり、ニュージーランドの桂冠詩人でありオークランド大学准教授のセリーナ・ツシタラ・マーシュ氏 (Dr. Selina Tusitala Marsh) を招聘し、講演会を開催した。マーシュ氏は、ニュージーランド在住のサモア・ツバル系の詩人であり、オークランド大学でオセアニア文学と創作を教え、詩集 *Fast Talking PI* (2009)、*Dark Sparring* (2013)、*Tightrope* (2017) を出版している。本稿はマーシュ氏の招聘期間中に行った二つの行事、2018 年 12 月 10 日のオープン・レクチャーと 2018 年 12 月 11 日の大阪大学 21 世紀懷徳堂ラボ・カフェ講演会をふりかえり、筆者自身の解説を加えながら、マーシュ氏が「社会における詩の位置づけを高める役割を担う」¹ 桂冠詩人として、いかにコミュニティと関わりながら、詩を広める活動を行ってきたかを紹介し、その作品を分析してみたい。



Courtesy of Selina Tusitala Marsh

2. 招聘行事の概要——オープン・レクチャーとラボ・カフェ講演会

マーシュ氏の招聘期間中に、二つの行事を行った。大阪大学豊中キャンパスの総合図書館ホールで 12 月 10 日（月）に開催したオープン・レクチャーは、学部生（共通教育学生など）を主な対象とし、学外者にも公開の形で行った。12 月 11 日（火）に大阪大学のアウトリーチ活動の場でもある大阪市のアートエリア B1 を会場として開催した大阪大学 21 世紀懷徳堂ラボ・カフェ講演会は、教員、院生、学部生のほか、一般にも公開の形で行った。今回の企画は、文学研究者だけでなく、学生や、一般の社会人など、広い聴衆にオセアニアで活躍する女性詩人の声を直接届け、詩人の声を通して作品にふれることによって、現

¹ 2018 年 12 月 11 日のラボ・カフェ講演会より。以下、オープン・レクチャー からの引用は (Marsh, lecture 1)、ラボ・カフェ講演会 からの引用は (Marsh, lecture 2) と表記する。

代において、言葉や詩がもつ力を感じてもらうことを目的とした。

12月10日のオープン・レクチャー（‘What’s New/Niu about the New Zealand Poet Laureate?’）には、全学共通教育の英語授業を履修する文学部・経済学部・法学部の学部生40名と大阪大学の大学院生若干名の参加があった。マーシュ氏は、桂冠詩人とは何か、ニュージーランドの桂冠詩人にはどんな人がいて、自分は従来の詩人たちとどう違うのか、という話から始まり、3編の詩を朗読で紹介しながら、南太平洋系の女性詩人・文学者として、詩を広く一般のコミュニティで共有していこうとする自らの活動について、学部生たちにわかりやすい英語で話された。講演タイトルにあ



Courtesy of Selina Tusitala Marsh

る‘Niu’は、サモア語でココナッツの若い実を意味し、南太平洋諸島系のはじめての桂冠詩人として、「詩の世界に、そして人々の世界に栄養分を与える」存在としての自らの役割を示唆している（Marsh, lecture 1）。マーシュ氏の生い立ちと詩人としての活動を自筆の挿絵入りで描いたユーモアたっぷりの絵本 *Mophead* もパワーポイントで紹介してもらった。モップのような髪の毛をした南太平洋系の少女であった子供時代、まわりの人と違うことに悩みながら、ある現代詩人（NZの詩人 Sam Hunt 1946-）² の朗読を聴いて言葉の力にめざめ、創作をめざすようになったという自らの半生を描いた絵本の朗読は、学生に親しみと共感を覚えさせ、自分の個性に自信をもって何かを表現していくことの大切さを感じさせたことが学生のレポートから読みとれた。ニュージーランドの桂冠詩人のために彫られた杖^{トコトコ}を手にとりながら、講演を聴く学生たちに「今日この杖にふれた皆さんも、この杖の物語の一部となっているのです」というマーシュ氏の言葉は感動を与えたようだ。オープン・レクチャーでは、共通教育英語クラスの文系の学部生に、普段、なかなか得られない体験をしてもらうことができた。受講生に提出してもらったレポートからは、「言葉の力をあらためて感じた」「詩のないところに詩をもたらそうとするマーシュ氏の活動に力強さを感じた」などの声が多数あった。講演のあとで、マーシュ氏に質問をしに来た文学部の学部生2名は、自ら詩を書いており、文系学部不要論など現代の日本社会の傾向に危惧を感じていて、詩や文学が必ずしも力をもちえない現在の社会のなかで自分たちに何ができるのかを真剣に考えていることも伺えた。

12月11日のラボ・カフェ講演会「杖の物語—詩と先住民の視点から環境について考える」（‘Tokotoko Tales: A Poetically Indigenous Environmentalism’）は、大阪大学言語文化共同プロジェクトの教員・院生が母体となり、現代の社会において、詩人が果たす役割を考察することを目的とした。大阪大学のアウトリーチ会場で行った結果、当初予定したより、一般社会人の参加も多く、主催の研究グループのメンバーのほか、日本英文学会関西支部や文学・環境学会（ASLE-Japan）の会員、大阪大学と他大学の院生・学部生など、あわせて30名ほ

² 詩の朗読パフォーマンスを広く行った詩人(<https://www.bookcouncil.org.nz/writer/hunt-sam/>)。

どの参加があった。³ 文学研究を社会に開かれたものにするために、一般公開でこのような催しを開催できたことは、意義があったと思われる。

詩は俳句、短歌に親しんできた日本人にとっても馴染みの深いものであるが、日常の生活から生まれる詩は、現在のニュージーランドにおいて、若者たちの間でパフォーマンスの形で親しまれており、現代社会のさまざまな問題を問いかける場ともなっている。コモンウェルス詩人として、またニュージーランドの桂冠詩人として、世界で活躍しながら、大学で教鞭をとるほかに、オークランド郊外のマオリや南太平洋系移民の子供たちが多い学校を訪問し、コミュニティにおいて詩を共有する活動を行うマーシュ氏の話を通して、グローバル時代の現代において詩が果たす役割と環境の問題を考えることを意図した。

マーシュ氏は、ニュージーランドの桂冠詩人に与えられるマオリの彫刻をほどこした杖 (tokotoko) がもつ文化的・政治的な歴史について語り、政治的であってはならないという桂冠詩人としての制約を受けながらも、環境問題その他の社会問題について、詩人として知識人として、いかに関わっていくか、その活動について語った。自らのアイデンティティについて語る詩 ('Naming Myself')、杖の詩 ('Tokotoko Tales')、地球温暖化の影響を受ける太平洋諸島国家の一つである祖父の故国ツバルをうたった詩 ('Tuvalu Blues' と 'Girl from Tuvalu')、コモンウェルス詩人としてイギリスのウェストミンスター寺院に招かれ、エリザベス女王の面前で朗読した詩 ('Unity') など 6 編の詩を朗読しながら講演が行われた。

マーシュ氏に引き続き、大阪大学言語文化共同研究プロジェクトのメンバーであるディスカッサントの山田雄三氏が、マーシュ氏への^{リスボンズ}応答として、講演の内容と関連づけながら、石牟礼道子の作品について論じた。英語と日本語を巧みに行き来しながら語り、石牟礼の作品の引用を水俣方言のアクセントで朗読する（熊本出身の）山田氏のパフォーマンスは見事で、マーシュ氏の詩の朗読と同様、生きた言葉の力を感じさせてくれた。石牟礼の「ルポルタージュ奇病」においては、語る主体としての「私」がまだ存在しないのに対して、『苦海浄土——わが水俣病』（1969）においては、観察の主体としての一人称の語り手「私」が意識的に表れ、水俣の方言で語り、その声が「水俣の労働者たちの共同体 (the collective circle of the working-class people in Minamata)」の声ともなっていることを指摘し、単なる「犠牲者 (victim)」ではなく、病める身体の不条理な現実を突き放してユーモアでとらえ、生きるために工夫し「発明」を見出す能動的な主体の逞しさに、山田氏は 'warrior-poet' であるマーシュ氏の姿勢を重ねて見ている。また、石牟礼の新作能『不知火』の終幕の踊りの場面の「ここなる浜に惨死せし、うるはしき、愛らしき猫ども、百獣どもが舞ひ出づる前にまづは、出て来よ。（中略）神猫となつて舞ひに狂へ、胡蝶となつて舞ひに舞へ」⁴ というくだりを引用し、人とともに水銀中毒の犠牲となった小さな^{いのち}生命たち、「踊り狂って」惨死した猫たちが最初に誘われることに山田氏は注目し、「石牟礼は、我々はみな繋がっていることを思

³ 大阪大学の院生・学部生参加者の内訳は、言語文化研究科（言語文化専攻・言語社会専攻）、人間科学研究科、文学部など。

⁴ 池澤夏樹編『石牟礼道子—日本文学全集 24』（河出書房、2015）p.497.

い起こさせようとした、潮も魚も猫も人間も、絆の世界において、我々はその世界を無情に傷つけてしまったのだが (she [Ishimure] tried to remind us that we are all united, salt-water, fish, cats and humans all, in the world of unity, though we have remorselessly abused it)」と締めくくった。生者と死者が交わる能の空間は、サモア人作家 Albert Wendt が「我々の生には死者の存在が織り込まれている」と述べたようなオセアニアの先住民文学の世界観と重なるところがあることを思えば、石牟礼の新作能に人間中心的な知覚を超えた要素を見出し、先住民的な自然観・宇宙観との近似性を見てとる山田氏の指摘は興味深い。ディスカッションの発表の後、会場の参加者に議論を開き、質疑応答の時間とした。

会場で配布したハンドアウトには、参加申し込み時に参加者から寄せられた自作の詩（瓜生ゆき氏の「ぬか壺」）も含んでいた。ディスカッションの時間が限られていたので、関連性にふれる時間はなかったが、祖母から譲り受けた今もう誰も使わなくなったぬか漬け壺という日常のモノを通して、家族の歴史や記憶を語るその短い詩は、杖に刻まれた個の物語と人々の歴史というテーマとも響き合うものであった。講演会終了後には、学生も一般人も多くの参加者がマーシュ氏と言葉を交わすために会場に残り、琉歌についてマーシュ氏に説明する沖縄の研究が専門の院生や、詩の同人誌を献呈する参加者もあり、さまざまなバックグラウンドの参加者との交流をマーシュ氏も楽しむ様子が見られた。アンケート調査では、マーシュ氏の肉声を通して、詩を共有することに感動を覚えたという感想が複数の参加者から寄せられた。二つのイベントの詳細を以下に記録しておく。3 節以降では解説を加えながら、さらに詳しく内容を見てみたい。

講演会（オープン・レクチャー）

日時：12 月 10 日（月）14:40～16:00

会場：大阪大学豊中キャンパス総合図書館 6 階ホール（参加者 40 名ほど）

主催：大阪大学大学院言語文化研究科共同研究プロジェクト Cultural Formation Studies

講師：Dr. Selina Tusitala Marsh（オークランド大学准教授・NZ 桂冠詩人）

司会・部分通訳：小杉世（大阪大学言語文化研究科准教授）

演題：**What's New/Niu about the New Zealand Poet Laureate?**

講演要旨：The Poet Laureate is a nation's highest award for its poetry. Its prestige has been limited to only 11 people since its inception in 1996. As the 11th Poet Laureate and the first Pacific Island Poet Laureate, I will address how both my ethnicity as not only a citizen of New Zealand but of wider Oceania, and my gender as a woman, have created new spaces and new stories for the public reception and understanding of this Award. In fact, I argue that creating both new and niu (the Samoan word for coconut) is vital if poetry is not only to be taken to the people, but to serve the people and our environment. （文責：Selina Tusitala Marsh）

講演会（大阪大学 21 世紀懐徳堂 ラボ・カフェ）

日時：12 月 11 日（火）19:00～20:40（18:30 開場）

会場：アートエリア B1（参加者 30 名ほど）

主催：大阪大学大学院言語文化研究科共同研究プロジェクト Cultural Formation Studies

講師：Dr. Selina Tusitala Marsh（オークランド大学准教授・NZ 桂冠詩人）

ディスカッサント：山田雄三（大阪大学文学研究科准教授）

司会・部分通訳：小杉世（大阪大学言語文化研究科准教授）

演題：Tokotoko Tales: A Poetically Indigenous Environmentalism

「杖の物語—詩と先住民の視点から環境について考える」

講演要旨：A tokotoko is a walking stick carved by Maori, the indigenous people of New Zealand. This ancient tradition has been incorporated in New Zealand's highest accolade for poets: the New Zealand Poet Laureate-ship. This public lecture examines this material tradition and its relationship with contemporary oral rituals, like poetry. It will argue that in following the Pacific proverb 'we face the future with our backs', recognising the tokotoko and its tales is key to saving our stories, and ultimately, our world.（文責：Selina Tusitala Marsh）

3. ニュージーランドの桂冠詩人と「杖」の物語

マーシュ氏が講演で述べるように、国によって称号が与えられ、特別な行事の折に詩をつくるなどの役割を果たす桂冠詩人は、イタリアの詩人 Albertino Mussato (1261–1329) に始まり、国によって任期も 2 年から終身までさまざまであるが、ニュージーランドでは詩の愛好者でワイン製造業者でもあった John Buck の後援によって 1996 年に桂冠詩人の制度が実現し、任期は 2 年である。マーシュ氏は 11 代目の桂冠詩人（女性詩人としては 5 人目、2 番目に若く、はじめての太平洋諸島系の桂冠詩人）である (Marsh, lecture 2)。⁵ ニュージーランドの桂冠詩人には、マオリ語で「トコトコ(tokotoko)」とよばれる彫像をほどこした杖が授与される。マーシュ氏によれば、この杖は Jacob Scott という彫刻家によって彫られ、「親の杖 (matua tokotoko)」(p.71 の写真参照) は授与式のときに用いられ、新しく任命された桂冠詩人のために個別に彫られるトコトコが完成し授与されると、「親の杖」はウェリントンの国立図書館の展示ケースに納められる(Marsh, lecture 2)。マオリのトコトコは、歩行のときに人の身体を支える 'walking stick' であると同時に、伝統的な集会所マラエでコミュニティの長が演説を行うときに用いる杖でもあり、話し手の「マナ＝権威 (mana)」を象徴するマオリの口承の伝統オラトリに関わる道具である。⁶ 同じポリネシアのサモアでは、ツラファレ (=talking chief, orator) が演説を行うとき杖 (to'oto'o=talking stick) と「フエ (fue)」と呼ばれるハエ払い（ハエを払うと同時に周りの邪気を祓う）をもつ。マーシュ氏によれば、ニュージーランドの歴代の桂冠詩人一人一人に与えられるトコトコには、その詩人の個人の人

⁵ ニュージーランドの桂冠詩人は、当初は Matahiwi Marae に集った文人・文学者とマオリのコミュニティ・リーダーたちの合議で選ばれたが、2011 年よりその運用を正式にニュージーランド国家がとりしきるようになった (Marsh, lecture 2)。

⁶ ニュージーランドの桂冠詩人の「親の杖」の空洞部分には、核による世界の破壊を批判する 'No Ordinary Sun' で知られるマオリの詩人 Hone Tuwhare (第 2 代桂冠詩人) の詩がおさめられている。

生の大切な要素が刻み込まれるという。ニュージーランドの桂冠詩人のなかで初の太平洋諸島系の詩人であるマーシュ氏のために彫られた杖は、母親の祖国であるサモアのアラトリの伝統を反映し、マオリの杖の上部にサモアのアエ（ハエ払い）を接合したユニークな形状になっている（章末の写真参照）。オープン・レクチャーでマーシュ氏が朗読した絵本 *Mophead* では、ココナッツの殻の繊維で編まれたアエが、マーシュ氏の「モップのような」髪の毛のイメージと重なることをユーモラスに描いていた。

4. 詩とアクティヴィズム

マーシュ氏は、詩人としての自分の使命は、「詩を通して人生を豊かにすること（‘I enrich lives through poetry’）」、「詩のないところに詩をもたらすこと（‘I take poetry into un-poeted places’）」であると述べる（Marsh, lecture 1, 2）。授賞式でマーシュ氏が朗読した詩は、「10 歳のオタフフの子供たちのために」「太平洋諸島の人々のために」「選挙戦で戦う女性たちのために」「労働者階級の人々のために」「土地を失った先住民の人たちのために」「詩が大嫌いな人たちのために」「サモアから移民してきたとき英語が話せなかった母にかわって」この賞を受けると述べている（Marsh, lecture 1, 2）。高年齢で受賞した歴代の白人の桂冠詩人たちとは違って、詩を「象牙の塔」の文人たちのコミュニティの外に持ち出し、コミュニティと深く関わりながら、「太平洋諸島の遺産」(Marsh, lecture 2) を受け継ぐ女性詩人として、社会の問題に提言を発していく存在として、マーシュ氏は自らを位置づけている。詩人の杖は博物館のガラスの展示ケースにしまっておくものではないと考えるマーシュ氏は、まさに 1970 年代のマオリの土地権運動のデモ行進（hīkoi=march）でマオリのリーダーたちが杖を手に行進したように、彼女に授与された ‘Tusitala Kapura’（‘kapura’はマオリ語で「ゆっくりと燃える火」を意味する）という名の杖をもって、マーシュ氏が在住するワイヘケ島の生態系に影響を与える開発に抗議する行進にも参加している（Marsh, lecture 2）。桂冠詩人は政治に関与してはならないという制約を認識しながらも、このデモ行進（hīkoi）は「地球を守るための、すべての人々（と生物）のための」活動であるがゆえに「非政治的」であるとマーシュ氏は解している。詩は「社会への抗議の形（‘a form of protest’）」（Marsh, lecture 2）でもある。次の 5 節で解説する気候変動の影響を訴えた詩は、その例である。

5. 詩の翻訳と解題

マーシュ氏が講演で朗読した詩のいくつかの拙訳をここにあげ、解題をしておこう。

‘Naming Myself’ は、マーシュ氏の母方の祖父の名「ツシタラ」をめぐる詩で、マーシュ氏が自己紹介としてよく朗読する詩であるという。祖父ツシタラはツバルに生まれ、高校に進学するためサモアへ渡り、牧師になったこと、当時、太平洋諸島地域を旅していた Robert Louis Stevenson (1850-94)⁷ にちなんでツシタラと名づけられたポリネシア人が多くいたことにマーシュ氏は言及し、この名とともに「物語を語ることの遺産を受け継いだ」と語る

⁷ サモア人に Tusitala（作家を意味するサモア語）の名で呼ばれ親しまれた。

(Marsh, lecture 1, 2)。Tusitala という名には Tusi（書く）と tala（語る）の間に ‘I’（私）の文字が挟まれており、語尾の ‘ala’ はサモア語で「道」を意味することにふれ、‘Pasifika Poet-Scholar’ として、共同体をつなぐ「通り道」として、自らがまた詩が果たす役割を論じている (Marsh, lecture 1, 2)。グリム童話『白雪姫』の「鏡よ、鏡」をもじった ‘Tokotoko Tales’ は、3、4 節で述べた口承伝統とアクティヴィズムとも関連した杖の物語であり、人間の存在を支え、アイデンティティの^{かなめ}要ともなる杖は、詩人に言葉を与える杖（ペン）でもある。

「私の名は (Naming Myself)」⁸

ツシタラ

物語の語り手

昨日まで聞いたことのない話が

新しい生命^{いのち}をえて生まれる

今日、私が語る物語は

彼らのものであり、また、あなたのもの

私の聖なる中心であるサモア⁹

から生まれた物語

今日、私が語る物語は

舌で語られた歴史を文字で綴り

言葉にならない神秘

沈黙の空間

時を超えた生命を通して

紡がれる

Tala（物語）を tusi（書く）こと

書かれた言葉に声を与えること

精神に言葉を与える

思考の枠組も

創造性も

褐色のこの魂

私たちは

私たちの声を高め

知らしめる

「杖の物語 (Tokotoko Tales)」

杖よ、壁に飾られた杖、
最も美しい詩人はだれ？

私じゃないわ 肌が茶色いから
それにどこから来たかという

杖よ、壁に飾られてなどいないで
ホールの収納庫に納まっていないで

私たちは自分の杖を
しっかりと手に握る

杖は私たちが語るのを助け
私たちが立つのを助けてくれる

⁸ 原文は Vilsoni Hereniko & Rob Wilson, eds., *Inside Out: Literature, Cultural Politics, and Identity in the New Pacific* (Rowman & Littlefield Publishers, 1999), p. 337-38 に掲載されている。

⁹ Samoa の語源 ‘sa (=sacred) + moa (=centre)’ に言及している。

次にあげる‘Tuvalu Blues’は 2014 年に BBC の‘Poetry Postcards’で紹介された詩であり、マーシュ氏の祖父の祖国であるツバルが直面している気候変動と海面上昇の問題をとりあげて、沈みゆく環礁の変化を描いている。

「ツバル・ブルース (Tuvalu Blues)」¹⁰

現在、海拔 8 メートル
空はしゃがみこむ
魚のスープの入ったボウルにゆっくりと沈むひしゃくのように
私たちの唇に運ばれる
かつて生きた美味しい塩味の生命

現在、海拔 5 メートル
空は垂れこめ、きしむ
からっぽのボウル
人のいない家
潮の家主に立ち退きを要求されて

現在、海拔 1 メートル
空は重たくのしかかる
土地を侵食する潮
水平線は湾曲する
視界のかなたの線をこえて
沈みゆく感覚をふりかえって
映す水たまりのほか何もない

講演の最後に朗読された‘Unity’は、2016 年にコモンウェルス詩人として、イギリスのウェストミンスター寺院で朗読した詩である。この詩は、地球温暖化の影響を受ける太平洋の諸島国家の一つであるキリバス共和国の島、ライン諸島のクリスマス島 (Kiritimati) にもロンドン (Ronton) という名の村があることに言及して、蜜蜂が花から花へと渡って受粉を助けながら蓄えた蜜で女王蜂を養うように、帝国の中心がその周縁の多様性によって栄養分を得ていること、そして、すべてのものが互いにつながっており、地球の裏側にある存在への想像力を働かせることで調和 (unity) のもとにあらゆる生物や人々が平和と繁栄を享受できるというメッセージを伝えている。そのメッセージは見事に非政治的で牧歌的なメタファーでカモフラージュされており、講演の表題にもある「先住民的な意識」でもって環境の問題や、人間同士の、そして自然と人間の関係性について考察する興味深い詩である。この詩で言及されるロンドンのあるキリバス共和国ライン諸島のクリスマス島は、

¹⁰ BBC Radio の Poetry Postcards 参照 (<https://www.bbc.co.uk/programmes/p022hbtt>)。

冷戦期にイギリスとアメリカによる核実験が行われた島である。また、それと並んで言及される Ocean Island (Banaba の英語名) は、イギリスによるリン鉱石採掘で荒廃した島であり、島民はフィジーのランビ島に強制移住させられた。オーシャン島は（核実験場となったクリスマス島と同様に）帝国による搾取が行われた土地として言及されるが、クリスマス島の名は直接言及されず、それに続く蜜蜂の牧歌的なメタファーによって、巧みに政治性が回避されている。最後から2連目の「ロンドンのイギリスは太平洋のロンドンを見つめ／お茶を飲みながら、私たちの考えを共有する」（‘... London’s UK seeing London in the South Seas / and sharing our thoughts over a cup of tea’）は、この詩の政治性に気づかない程度にイギリス人が実際には太平洋のロンドンに目を向けていないこと、今もなお健康を蝕まれ、「健康を共有」できない被ばく者や、鉱山開発で故郷の島を失った人々がイギリス連邦内に存在することを見ていない事実を思えば、皮肉である。そのような現実をふまえながら、地球の裏側を見つめる想像力の必要性をこの詩は訴えている。

つながり
「調和 (Unity)」¹¹

人間は国々を超えて存在する（ハワイの格言）

調和について語りましょう

ここロンドンのウェストミンスター寺院で

キリバス共和国にもロンドンがあるのをご存じ？

そして、南太平洋のオーシャン島のことを

私たちは人類の潮によってつながっている

連合、忠誠、植民地の歴史

海の潮は私たちの身体^{からだ}を流れる血潮のように
やがては土に戻る私たちの骨の塵のように

53 のイギリス連邦の加盟国の旗は

私たちの調和の布でつぎはぎされている

それはサモアの哲学で Va と呼ぶもの¹²

あなたの行為は私に影響を与えるということ

自然の調和のモデル

花から種へと花粉を運ぶ

蜂たちはその巣で女王蜂を養い繁栄する

¹¹ 原文は Selina Tusitala Marsh, *Tightrope* (Auckland UP, 2017), pp. 37-40 におさめられている。

¹² ‘Va’ は、人と人、人と物の間にある空間、相対的空間 (in-between space) をさすサモア語。

調和は蜂たちを生かし、羽音を響かせる

蜂たちは私たちの果物や野菜の実りをもたらす鍵
でも寄生虫の攻撃と殺虫剤は

蜂を脅かし、あなたや私も脅かす
すべてがつながっている、それが調和

‘U’（あなた）と ‘I’（私）が調和 (unity) のなかにある
大きな努力が必要だけど、それは無料¹³

ツバル出身の私の祖父、正確にいうと
南太平洋にポチャリと落ちた小石のような小さな島国で生まれた

53 のイギリス連邦国家のなかでもっとも小さな国
広大な星座を読みとる能力ではもっとも大きな国

私の先祖は空の星と潮流に導かれて航海した
それはコロンブスが帆をあげるよりもずっと前のこと

私たちがあとに残すものは、私たちの前に生きた先祖たちにも関わる
私たちは背中を未来にむけて、岸から岸へと渡る¹⁴

私たちはイギリス連邦（私たちの「共通の富」^{コモンウェルス}）のために働き蓄え
丈夫な身体を共有し、健康を共有する

海の潮は私たちの身体^{からだ}を流れる血潮のように
やがては土に戻る私たちの骨の塵のように

海を救うことは、蜂を救うこと
ロンドンのイギリスは太平洋のロンドンを見つめ
お茶を飲みながら、私たちの考えを共有する

‘U’（あなた）と ‘I’（私）が調和 (unity) のなかにある
大きな努力が必要だけど、それは無料¹⁴

6. おわりに

社会を変革するための道具として詩を用いるというマーシュ氏の姿勢は、マーシャル諸島出身の女性詩人キャシー・ジェットニル＝キジナー (Kathy Jetñil-Kijiner) の核実験や気候変動に言及した詩の朗読パフォーマンス、フィリピン共和国出身でオーストラリア在住の

¹³ 原文は ‘costs the earth and yet it’s free’ となっている。

¹⁴ カヌーは進行方向に背を向けて漕ぐ。過去（先祖）を見つめながら、未来を歩むことの比喩。

トコトコ
詩人の杖の物語

詩人ユーニス・アンドラーダ (Eunice Andrada) の気候変動難民の存在を訴えたパフォーマンス映像 ‘Salt Water’ (2015)¹⁵ など、多くの若い世代の詩人たちの新しい声にも引き継がれている。詩人の杖 (tokotoko) は、マーシュ氏の精神を支える杖であり、社会を変えるためにふるうペンを象徴するものでもある。詩を読む私たちもまた、世界に「栄養分」を与えてくれるその詩の力に触発されて、私たち自身の存在を支える杖を心にもち、語らなくてはならない。最後にマーシュ氏とディスカッサントの山田氏、この招聘事業を可能にしてくれた日本英文学会関西支部、香港大学のシンポジウム主催者 Otto Heim 氏、講演会に足を運んでくださった方々、会場の準備を手伝ってくれた院生たちに謝意を表したい。



大阪大学 21 世紀懐徳堂ラボ・カフェ (於 アートエリア B1、2018 年 12 月 11 日)

‘Tokotoko Tales: A Poetically Indigenous Environmentalism’



オープン・レクチャー

(於 大阪大学総合図書館ホール、2018 年 12 月 10 日)

‘What’s New/Niu about the New Zealand Poet Laureate?’

¹⁵ <https://www.youtube.com/watch?v=T4C2g-PHE4Q>